『江戸川大学紀要』第 32 号（2022 年 3 月）pp.285-292

「搾取」のない経済圏の可能性：マルクス剰余価値論再考

荒谷　大輔*

序

本論では，マルクスの剰余価値論の再検討を通じて，搾取のない経済圏の可能性を考える。

マルクスは，資本家による労働力の購入によって等価交換の式に反映されない「剰余価値」が搾取されていると主張した。資本の増殖は労働力の搾取によるのであり，搾取のない社会を作るためには，搾取を被っている「労働者階級」を先鋭化させ，革命によって共産主義社会を実現しなければならないといわれた。

しかし，こうしたマルクスの主張は，労働価値説を前提にする限りで有効なものにすぎないといわれる。資本家によって労働者が搾取されているという議論が成立するためには，等価交換の繰り返しによる価値の増加は他ならぬ労働によるはずだという強い想定がある。商品の販売価格は，生産に用いられた材料の原価で決まるのではなく，その商品に対する人々の欲望の強さによって決定すると考える主流の経済学においては，マルクスの議論は古典派経済学の古い枠組みに捕らわれたものと見なされるのである。

だが，マルクスの議論は，後述するように，実際には労働価値説にもとづくものではない。マルクスの価値形態論を再読することによって，その点を明らかにすることが本稿の第一の目的となる。マルクスにおける「価値」とは，他者の欲望を媒介にしてはじめて成立する社会的なものであり，各人の「私的労働」はそれ自身においては何の価値をもたないものと見なされるのである。

そのことは，商品の等価交換において，等式には表現されない剰余が常に発生していることを意味する。自らの私的労働を他者の欲望を介して価値づけようとする人々の欲望の実現が，交換の成立自体に常に含まれている。マルクスが「剰余価値」と呼ぶものが発生する構造を明らかにすることで，「搾取」と呼ばれてきたものに新しい意味が与えられることになる。共産主義革命は，その意味においては，「搾取」のない経済圏を実現するものではなくむしろ，新しい「搾取」の形態を生み出すものであることが明らかになるだろう。「搾取」のない経済圏を実現するためには，他者の欲望を媒介にした社会関係の自由を確保する必要があることが示されることになる。

1.「抽象的な人間労働」と剰余価値の搾取

マルクスの剰余価値論

マルクスは，等価交換の中に含まれる剰余価値の存在を示すことで，資本家による労働者の搾取の問題を示した。市場経済における商品の交換は常に「等価交換」と見なされるが，資本が資本として機能するためには，交換の中に価値の増大が期待される必要がある。ある量のお金Ｇによって労働力を含めた商品 W を購入し，それらの成果物を売ってお金（G’）を得るとき，獲得されたお金 G’ が投入されたお金 G よりも多くなることが期待されているのである。

資本を投下して労働力を含めた商品を購入する交換（G-W）が等価交換であり，その成果物を売る交換（W-G’）も等価交換であったとすれば，（G-W-G’）という 2 回の等価交換において価値の増大はどこで起こるのか。G’ と G の差（Δ＝G’-G）としての「剰余価値」の源泉が，労働力の

2021 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　基礎・教養教育センター教授　哲学／倫理学

搾取によって支えられるというのがマルクスの議論であった。賃金を払って雇い入れた労働者の生産性を高め，より多く働かせることで剰余価値を生み出すことで，資本家は富を得ているとマルクスは訴えたのだ。

「欲望の隔たり」と交換

しかし，序に見たようにマルクスの議論は，労働価値説に基づく限りで有効なものにすぎない。剰余価値の発生を労働者の労働によるものと前提にせず，人々の欲望の差異によって発生すると考えれば，マルクスの搾取論は成り立たなくなると考えられる。ある商品を安く買い需要の高いマーケットで転売する「商人資本」も，労働者を雇い入れて商品を生産する「産業資本」も，単に人々の間の欲望の隔たりを埋めるものと見なされるのである。

だが，そこで埋められる欲望の隔たりとは，実際にはどのようなものなのか。「等価交換」と見なされる取引における「欲望の差異」を立ち入って検討することで，時代遅れと見なされるマルクスの剰余価値論の現代的な意義を見出すことが可能になる。というのも，「等価交換」とはそもそも，交換者の間の欲望の差異を前提にするものだったからだ。すなわち，「欲望の隔たり」が存在するところに剰余価値が発生すると考えるならば，すべての等価交換において常に剰余価値が発生していると考えることができるからである。以下，マルクスの価値形態論を読み直すことで，いかにして剰余価値が「搾取」されるに至るかを検討したい。

交換の剰余

まずはマルクスが相対的価値形態と呼んだ２商品の交換の場面を考えてみる。マルクスの価値形態論とは価値と呼ばれるものがどのような形態をとって現れるかを問題にするものであったが，ここでは「価値」は相対的なものに留まっていることが示される。つまり，ここでは交換される物の間に共通の価値基準は存在せず，ある商品ａの価値は別の商品ｂとの関係においてのみ決定すると考えられるのである[(1)]。

ここでマルクスが２商品の関係のみを問題にし，それらの商品に対して実際に価値判断をする「交換者」を議論に登場させていないことが問題になる。いわゆる「商品語」の問題である。佐々木隆治は，「価値表現関係が成立するためには多面的な欲望をもった私的諸個人の関わり合いが不可欠である」と認めつつも，「マルクスがあえて「商品語」という比喩に仮託してこの事態を説明するのは，価値表現を必然とする物象化された関係においては，その価値表現に際して，私的諸個人の意志行為を通じて無意識のうちに，ある一定の形態的論理，形態と実体の連関が必然的に形成されることを指摘するためであった」[(2)]と述べ，その点を見落として交換者の「主観」を導入したことが廣松渉の物象化論の致命的な欠点だったという[(3)]。佐々木によれば，商品同士の関係によって価値が形成されることは，交換者にとって無意識のままに商品同士の間で価値のネットワークが出来上がることを意味するのであって，そのネットワークの形成に交換者の意志行為は問題にならないと言われるのである。

佐々木の廣松批判は，廣松の議論の存在論的側面を捨象して認識論的側面だけを切り取るもので公正とはいえないが，交換における「無意識」の作用を強調する点で興味深い論点を提示している。「人間たちは，彼らの生産物を互いに商品として関連させるために，彼らの相異なる労働を抽象的人間労働（abstrakt menschlicher Arbeit）に等置することを強制される。彼らはそれを知らないが，物質的な物を，価値という抽象に還元することによって，それを行うのである。これは彼らの脳髄の自然発生的な，したがって無意識的な本能の働き（bewußtlos instinctive Operation）であり，この働きは彼らの物質的生産の特殊な様式から，そしてこの生産が彼らをその中に置くところの諸関係から必然的に生まれる」（MEGA II/5, 46）。マルクスがいうように，人間たちは無意識のうちにそれぞれの「相異なる労働」を「抽象的人間労働」に等置し，そのことによって商品同士の価値のネットワークを構成すると考えられ

るのである。

しかしそのとき問題にすべきは，その「無意識的な本能の働き」がどのようなものであるかということであろう。精神分析の議論が確立する以前のマルクスに対して，その点立ち入った考察を求むべくもない。しかし，われわれは，明確にヘーゲルの弁証法を下敷きにする[(4)]マルクスの価値形態論を精神分析的に理解する道筋を得ている[(5)]。ラカンの精神分析を参照することによって，われわれはマルクスの価値形態論において語られる事柄を新しく意味づけることができるのである。

そもそもなぜ「人間たち」は，各人の私的な労働を「抽象的人間労働」に置き直さなければならないのだろうか。無意識における「強制」といわれるものの内実は，マルクスにおいて必ずしも明らかではない。しかし，人間は他者の欲望を媒介にすることによってはじめて自らの社会的な立場を確立できるという精神分析の議論を接続すれば，様々な臨床経験に基づく思想的文脈が明らかとなる。すなわち，すでに何らかの価値基準を共有しているような特定の社会関係を前提にせず，その成立条件を含めて考えるならば，「私的な労働」によって生み出された生産物は，他者の欲望を媒介することによってはじめて「価値」をもつものとなるのである。

そのときの「人間たち」が，いまだ如何なる社会関係も前提にする存在ではないということが重要となる。彼らはいまだ「商品語」，すなわち交換によって形成されるような商品同士の価値のネットワークを理解していない。共通の価値基準が成立する場面を問題にしている以上，特定の社会関係を前提にすることはできない。それはすなわち，ここで語られる「人間たち」は，特定の「社会」における「自己」の意識を獲得していないことを意味する。精神分析においてだけではなくヘーゲルにおいても，「自己」の意識は他者の承認において確立するものといわなければならないのであった。ここでマルクスが問題にしている事柄もまた，すでに何らかの「社会」に属し，そこでの「自己」の意識を確立した者同士の商品の交換と考えることはできない。ここで問題とされているのはむしろ，他者との交換を介した「自己」の行為の価値づけだと考える必要がある。人間たちがそれぞれの「私的労働」を「抽象的人間労働」に等置することを強制されるのは，その行為が「人間たち」にとって，他者の欲望を媒介にした自己の社会的存在の位置づけに関わる本質的な行為だからだと考えられるのである。

このように考えるならば，相対的価値形態における交換のあり方においてすでに「剰余価値」が発生していることになる。20エレのリネンが1着の上着と交換されるとき，20エレのリネンと1着の上着が「等価」と見なされることになるわけだが，しかしそもそも交換が行われるためには，その交換が互いにとって価値のあるものでなければならないだろう。その等価交換は，「人間たち」にとって，それによって自らの私的労働を他者の欲望を媒介にして価値づける行為を意味しているのであった。だとすれば，そこでは単に「等価値」のものが交換されたのではなく，その交換によって芽生えた商品間の価値のネットワーク＝商品語の中に互いの「私的労働」を位置づけ「自己」の行為を意味づけようとする「人間たち」の無意識の欲望が満たされたと考えることができる。すなわち，その「等価交換」において，人々は同じ価値のネットワークに参入し，その中での「自己」の意識を確立する欲望を満たしているのであり，「等価物」の交換に還元されない「剰余価値」を生み出していると考えることができるのである。

交換という行為の中に人々の社会関係への欲望が存在していることは，何らかの「社会」の成立を最初から前提にした考え方を採ると見落とされることになる。それぞれの商品の「価値」が，例えば一般均衡論の名で語られる理論に照らして決定されると考えるならば，そこで人々の社会関係への欲望は，あらかじめ特定の「社会」の中の個別の商品に対する効用関数に還元されることになるだろう。人々ができるのは，自らの「私的労働」を市場原理によって決定される価値のネットワークに適合するように位置づけることだけで，交換を通じて新しい価値のネットワークを築いて

いく道筋はあらかじめ閉ざされている。交換によって発生していた「剰余価値」は，そのとき，もはや人々の間の社会関係を形作るものとして享受されず，等価交換の表象の中に隠されることになる。

では，そのとき「剰余価値」はどこへ行ってしまったのだろうか。あるいは，人々の社会関係への欲望はどのようにして背景に退くことになるのか。マルクスの価値形態論の続きをさらに辿っていきたい。

偶然的交換から価値基準の共有へ

2つの商品の間の交換は，いまだ「偶然的」なものにすぎず，そこで発生しかけた商品間の価値のネットワークもまた一過性のものにすぎない。場当たり的に行われる交換によって成立した商品の交換比率は，時々で変化することになるだろう。他者の欲望を介して「自己」の行為の価値を見出そうとする「人間たち」の無意識の欲望も，確固とした社会関係の中に自らを見出すには至らず，不安定なままに留まっている。

しかし，そうした交換が積み重ねられることによって商品間の価値のネットワークは徐々に固まっていく。個々の商品が語る「商品語」は「〔人々の私的〕労働が人間労働という抽象的属性において」個々の商品の「価値を形成している」という「思想（Gedanken）」を語るとされた[(6)]が，商品間の価値のネットワークが形成されるに従って，それらの言葉の用法も一般化していくことになる。人々の無意識の欲望に動機づけられた交換の積み重ねは，人々の間で共通の価値基準を共有するよう導かれるのである。

そのとき，ひとつの商品は他の多数の商品と関係づけられることになる。ある商品（例えば20エレのリネン）の「価値」は，他の複数の他者の商品（1着の上着，10ポンドの茶，40ポンドのコーヒーなど）によって測られることになるとマルクスはいう。

20エレのリネン	＝	1着の上着
	＝	10ポンドの茶
	＝	40ポンドのコーヒー
	＝	・・・

ここでリネンの「価値」は，上着だけでなく茶，コーヒーなどの商品の量によって評価されているわけだが，交換の積み重ねによって価値のネットワークが一般化するに従って，両辺の逆転が可能になる。

1着の上着	＝	20エレのリネン
10ポンドの茶	＝	
40ポンドのコーヒー	＝	
・・・		

すなわち，「価値」が問われる主体が逆転し，他の複数の他者の商品（1着の上着，10ポンドの茶，40ポンドのコーヒーなど）の「価値」が，特定の商品（20エレのリネン）によって測られるような形態へと変化するといわれたのである。

一見するところ，両辺の逆転において変化は何もないように見える。しかしまさに，この逆転こそ，商品間の価値のネットワークが確立することによって可能になるものなのである。ひとつ前の「価値」の現れ方においては，自分の生産物（例えば茶）を自分が欲しいもの（同，上着）と交換しようと思ったとき，その人は上着を提供する人の中に茶を欲しい人を見出す必要があった。あるものの価値が複数の商品によって測られるという形態では，関わる他者の数が増えただけで，安定した交換の機会を提供する価値基準の共有はいまだ不完全なものに留まっているといわなければならない。

しかしながら，交換の積み重ねにより，商品間の価値のネットワークに高い一般性が確立するようになると，人々はその「商品語」を用いて，自らの私的労働の成果をまずは「価値を測るもの」（上の例ではリネン）と交換することができるようになる。茶の生産者は，リネンと交換することで複数の上着製作者との交渉機会を得ることにな

るだろう。そこではもはや「茶を欲する上着製作者」を探す必要はない。人々が一般化された価値のネットワークを共有することで，その内部での交換機会が爆発的に増えることになる。

ひとつ前の「価値」の現れ方が，単なる他者の複数化であったのに対して，一般化された価値のネットワークの共有において問題になっている他者は，より抽象化されものになっていることに注意しよう。人々が自分の私的労働の「価値」を他者の欲望を介して価値づけるとき，一般的な価値形態においてその「他者」は個々の具体的な他者ではなく，その「商品語」に精通していると想定される「他者」になっている。それぞれの人々の私的労働は，その「他者」の承認を得ることによって，価値のネットワークの中に位置づけられるのである。それこそがまさに，ラカンが「大他者」の呼ぶものであり，マルクスが「抽象的な人間労働」といったものにほかならない。

ラカンにおいて「大他者」とは，シニフィアンの宝庫と呼ばれ，シニフィアンとは他のシニフィアンとの関係の中に意味を示そうとするものといわれていた。ヒエログリフが一面に刻まれた石版（ロゼッタ・ストーン）をナポレオンが見出した場面を考えてみよう。そこで示される数々のシニフィアンの意味は，読み手には全く不明である。古代の人々が刻んだと見なされるシニフィアンが数千年後に見つけた人に宛てられたものと考えるのは馬鹿げている。シニフィアンは他のシニフィアンとの関係において，そのシニフィアンのネットワークにおいて示されているだろう何らかの意味＝価値を示しているのである。ラカンにおける大他者とは，そのシニフィアンを完全に理解していると読み手が想像する存在を指すものであった。読み手は，シャンポリオンがそうしたように，そのシニフィアンのネットワークに精通していくことで，やがて自らその言語を用いられるようになる。

一般化された価値のネットワークに出会い，自らの私的労働の価値をはじめて位置づけようとする者においても，同様のことが起こっている。人ははじめ，その「商品語」を話すことはできない。商品語は，交換の積み重ねによって生み出される商品の間の価値のネットワークであったが，そのネットワークにはじめて参入して自らの私的労働の成果を位置づけようとする者にとっては，その市場の価値基準は明らかではない。しかし，その状態でもその商品語が十分に一般化されたものである場合には，その中での「公正」な価値づけがあるはずだと想定される。その公正な価値づけを行う主体は，個別の他者ではなく，抽象化された一般的な他者である。商品語に精通していると想定される他者は，その意味においてラカンの大他者に明確に対応しているといえるのである。

「人間たち」はこうして，自らの私的労働を「抽象的な人間労働」に還元することを「強制」されることになる。それは先に見たように，人々が自らの存在を他者の欲望を介して位置づけようとする無意識の欲望の働きというべきものなのだった。他の人々との間で価値基準を共有し，その中に自らの行為の意味＝価値を位置づけていくことは，社会関係の中で「自己」を見出そうとする人々の欲望によるものなのである。

ここでの「抽象的な人間労働」は，すべての人間に共通する単位時間あたりの労働の生産性を規定するものではないと考える必要があるだろう。マルクスは「個人的労働時間」と「一般的労働時間」を区別し，すべての人間の個々の労働が同じ「価値」を算出するという考え方を最初から退けている。「抽象的な人間労働」はむしろ，それによって個々の労働の成果を評価するものとして位置づけられることになる。交換の積み重ねによって生み出される「抽象的な人間労働」は，人々の個々の私的労働の「価値」をはかる基準となっているのである。

その限りにおいて，マルクスの「抽象的な人間労働」を，労働価値説を前提にするものと見なすことはできないことになる。それはむしろ，様々な他者の欲望を介する中で一般化された価値基準にほかならない。人々の欲望の関数として現れる価値の基準はもはや，「市場原理」と呼ぶべきものとほとんど変わらないものを指し示しているとさえいえる。一般化された価値のネットワークの

中で，それぞれの商品の「価値」を決定するものこそ，市場原理と呼ばれるべきものだったからである。

だが，ここで注意すべきは，このように価値のネットワークが一般化することにおいて確立する「抽象的な人間労働」が，決してこれ以外にはありえないような「唯一」のものではないということだ。抽象的な人間労働は，人々の承認を巡る無意識の欲望の絡み合いの結果として形成されるものであり，実際の交換の積み重ねを離れて「人間一般」に拡張することはできない。マルクスの価値形態論において問題になっていたのは，共通の価値基準がいかにして形成されるかであり，その基準が一般化された状態をあらかじめ読み込み，すべての人間が同じひとつの「抽象的な人間労働」に還元されると考えることは，単に論点先取をしているだけでなく，交換において発生していた「剰余価値」の搾取に加担することを意味するのである。

剰余価値の「搾取」

「剰余価値」とは，先にみたように，等価交換の図式には表象されないまま，他者との間で社会関係を構築しようとする人々の無意識の欲望の実現として位置づけられるものだった。「等価」なものをわざわざ交換するように人々が導かれるのは，その交換を介して他者の承認を得ようとする欲望が存在したからだった。それゆえ，すべての人々の私的労働が同じひとつの抽象的な人間労働へと還元されると前提にすることは，人々が無意識に機能させている社会関係への欲望を等価交換の表象の外におき，前提とされる以外の社会関係を構築する道筋をあらかじめ断ち切ることを意味することになる。剰余価値は，そのとき，同じひとつの社会関係の中に「自己」を位置づける目的に自動的に宛てられることになるだろう。他者との間に社会関係を構築しようとする人々の欲望は，そこで唯一の「抽象的な人間労働」に自らの労働を合致させるように強いられることになるのである。その社会関係の中に自らの労働を位置づけることを，意識的であれ無意識的であれ人々が望むのであれば問題は発生しない。等価交換に表象されない剰余価値は，その場合でも人々がそこで「自己」を確立する欲望の享受に用いられることになる。しかしもし，人々がその唯一の価値のネットワークに参入することを望まず，別様な社会関係での交換を志向する場合にはどうなるだろうか。そこでなお，別様な社会関係を望む欲望が意識的であれ無意識的であれ抑圧され，自らの私的労働をその唯一の基準に合致させることを強いられるのだとすれば，そこには剰余価値の搾取というべき事態が発生していると考える必要がある。この点，もう少し立ち入って検討してみよう。

各人が自らの労働力を商品とし，それを賃金と交換する場面を考える。そうした交換は，他者の欲望を媒介に「自己」の存在の確立を目指すものであった。「労働力」自体を交換に供する場面では，その人の潜在的な能力も含めた「私的労働」が評価の対象になる。私的労働の成果だけでなく，労働によって将来生み出されるものについても先に交換に供されるため，その評価はより一層「自己」の存在に関わるものとなるだろう。そこでは，市場における「自己」の価値が「商品語」によって語られることになる。

そのとき，人々の私的労働がただひとつの同じ「抽象的な人間労働」に還元されることを強制されるとすれば，どうなるだろうか。人々は望むと望まないとにかかわらず，みな同じひとつの価値基準によって「労働力」の価値を評価されることになるだろう。すべての交換は，他者と新しい関係を構築する力を失い，すべては等価交換の式で表象されることになる。関係の中心にある人々は，そうして周縁の人々を搾取することになる。自らの「私的労働」を売る機会に乏しい人々は，提供された販売機会に飛びつく以外になく，「報酬」との等価交換の中で容易に「剰余価値」を搾取されることになるだろう。人々が結びうる他者関係があらかじめ制限されることで，関係の網の目の中心と周縁の間に，必然的に搾取の構造が発生することになるのである。

いま，強制される唯一の「抽象的な人間労働」

が「市場原理」と呼ばれる価値基準である場合を考えてみよう。その価値のネットワークにおいて人々の交換は，「個人」の利益の追求と位置づけられることになる。そこで交換は，社会関係を取り結ぶものとしては機能せず，他者との関係を求める人々の欲望は，はじめから存在しないものと見なされる。「労働力」の販売は，そこで「個人」の間のやり取りにすぎないと表象されることになる。

しかしそれでも，人々が市場原理を介した評価以外に他者から承認を受ける手段を持たないとすれば，マーケットの中心による周縁の搾取は必然となる。労働力を含めたすべての商品が市場原理を介して評価されなければならないのだとすれば，市場原理の下でより多くの販売機会を確保できる者が周縁におかれる人々を搾取することが可能となる。ここでもまた，人々が結びうる他者関係があらかじめ制限されることによって，その中心にいる人々が周縁の人々を搾取する構造が生まれるのである。

2. 搾取のない経済圏の可能性

では，そのような搾取のない経済圏を構築するには，どうすればよいのだろうか。

資本家と労働者の対立？

周知のようにマルクスは，搾取される労働者階級を先鋭化し，労働者階級を主体とした革命を起こすことを通じて搾取のない共産主義者会を構築しようとした。しかし，前項で見たように，「搾取」において問題となるのは中心と周縁の非対称であり，必ずしも特定の階級に限定されるものではない。

確かに，市場原理と呼ばれる価値のネットワークにいち早く適合した先行者が，後から参入する人々の「交換機会」を制御しつつ剰余価値を搾取する構造があることは確かだろう。経済圏の拡大は先行者に大きな利益をもたらし，ほとんどの人々がそこで他者からの承認を得て「賃金」を得ることなしには生きられない社会になることで，その非対称がますます顕著になっているとも考えられる。

しかしそれでも，中心／周縁の関係は相対的なものでしかないといわなければならない。構造的な不利があるとしても周縁におかれた者が相対的に中心に近づき，そこで利益を得られる道筋は確保されている。構造的不均衡が不可視化され，物語としての「機会の平等」が保たれている状況（市場原理を価値基準とする価値ネットワークへの参与を無意識の次元で強制されている人々が意識の上で共有しているのは，まさにそうした物語なのであった）では，周縁におかれた人々を「労働者階級」として先鋭化することは，人々の経済活動に政治的な操作を意図的に加えることを意味するのである。

マルクス主義の陥穽

マルクス，あるいはマルクス主義と呼ばれる政治的な運動は，そうした政治的操作を理想社会へ移行するための手段として正当化した。「プロレタリアート独裁」を手段として，まずは資本主義を打倒する革命勢力を確立することが目指された。

しかし，まさにそうした政治的操作が，資本主義と同じように他者関係を求める人々の欲望を抑圧するものであることを見る必要がある。周縁におかれる者を「労働者階級」として先鋭化し，共産党への結束のもとに社会を改革することは，別な価値のネットワークに人々の「交換」を縛りつけることを意味する。共産主義における「抽象的な人間労働」が新たに「本当の人間のあり方」と見なされ，すべての人々の私的労働の価値がその新たな「抽象的な人間労働」を尺度に測られることになるのである。剰余価値の搾取が人々の他者への欲望を特定の社会関係に縛り付けることによるのだとすれば，共産主義社会もまた，共産党に近い人々を「中心」とし，心ならずも従わざるをえない人々を「周縁」とする新たな搾取の構造を生み出してしまう。理想社会のための手段と見なされた政治的操作は，一党独裁の構造を生み出すことによって，搾取のない社会を目指した運動を

自ら裏切ることになるのである。

搾取のない経済圏を構築するために：小規模コミュニティのネットワーク化

では，搾取のない経済圏を実現するために必要なことは，何なのだろうか。これまでの議論から明らかなように，人々の他者関係への欲望が自ら知らぬ間に特定の「抽象的な人間労働」へと還元されない仕組みを構築することが，真の意味での「搾取」のない経済圏を実現するために必要なこととなる。等価交換の式には表象されない剰余価値が，常に実際に交換する者にとって他者からの承認を意味するものとして機能する経済システムを構築することが求められる。自らの私的労働を他者と共有される「抽象的な人間労働」へと還元することが「強制」によらず自ら選択できるシステムを整えることが必要になるのである。

求められるのはつまり，価値基準の共有をそこに実際に参加する人々の欲望に委ねられる範囲に留めることになるだろう。「先行者利益」を増やすため，いたずらに価値のネットワークの適用範囲が拡大されることは抑制されなければならない。「社会＝マーケット」をグローバル化させ，唯一の価値基準を人々に強制する契機を排除することが求められる。

そのために提案されるのが，小規模コミュニティのネットワーク化である。

小規模コミュニティ内の取引は，そこに参加する人々による内在的な価値基準の共有を導き，搾取を発生させる契機を排除することができる。人々は他者との具体的な関係において，他者の望むものを作ることで，そのコミュニティにおける自らの立場を確立することができる。

もちろん，こうした小規模コミュニティ内の取引は，原理的に交換機会をそのコミュニティ内の成員に限定する効果をもってしまう。顔の見える範囲での交換は人々の絆を深めるが，そのことがまさに自らの提供する商品を販売する機会を減らす効果をもつ。それゆえ，いくら小規模コミュニティ内の取引が「理想的」であったとしても，それがグローバルなマーケットを実現した社会において実現した経済成長の恩恵を手放すことを意味するのであれば，その実現は不可能であるようにも思われる。小規模コミュニティの取引がいかに搾取をなくすものであったとしても，すでに獲得した利便性を手放すことは，人々に対して「革命」にも等しい無理を強いることであるように思われるのである。

しかし，そうした問題は，小規模コミュニティをネットワーク化することによって解決される。それぞれのコミュニティがそれぞれに閉じたものではなく，個々人を媒介として多重に重なり合うことで，交換機会を拡大することが可能になるのである。そこでは多様な「社会＝マーケット」が，その成員をブリッジとして多重に折り重なることで結合し，全体的な価値判断の統一がないままに取引可能性が開かれることになる。

こうした経済圏については，単に理論上の可能性を考察するだけでなく，現実社会での実装可能性を考える必要があるだろう。その点については，稿を改めて考察することにしたい。

《注》

（1） マルクスは「20エレのリネン＝1着の上着」という等価交換がなされる場面を例示し，そのときのリネンの価値がどのようにして表現されるのかを示している。「〔リネンの価値が表現されるのは〕どのようにしてか。リネンが上着に対して，それを自分の「等価物」，自分と「交換されうるもの」とするように関連することによって，である。この関係の中では上着は，価値の現実存在の形態として，価値物として通用する。というのは，ただそのようなものとしてのみ，上着はリネンと同じものだからである。他方では，リネンそれ自身の価値存在が現れてくる。あるいはひとつの自立的な表現を受け取る。」（MEGA II/6, 83）

（2） 佐々木隆治『マルクスの物象化論』（堀之内出版，2021），p.214

（3） *Ibid.*

（4） 例えば，アンドレアス・アルント著，尼寺義弘訳「マルクスとヘーゲルの弁証法 ―絶対的にあらゆる哲学の最後の言葉―」『阪南論集，社会科学編』48号（阪南大学，2012）

（5） ラカン自身，マルクスの価値形態論を自らの鏡像段階論に関係づけている。例えば，Lacan, *Le Séminaire V*, Seuil, 1998, p.81/ ラカン『無意識の形成物』上，岩波書店，115頁

（6） MEGA II/6, 85。佐々木前掲書，185頁を参照